私の戦争と平和

内海 敬三

◇柳条湖事件

私が生まれた1931（昭和６）年は、世界恐慌の最中で、日本は柳条湖事件を口実に満州全土を制圧し、傀儡政権の満州国を樹立。さらに国際連盟脱退、上海事変から盧溝橋事件とついに泥沼の日中戦争となり、世界から孤立を深めながら、あの15年戦争に突き進んで行った頃である。

◇兵隊さんよ、アリガトウ

小学校の国語は「ススメ、ススメ、ヘイタイススメ」、唱歌は「肩を並べて兄さんと、今日も学校へ行けるのは、兵隊さんのお陰です、～兵隊さんよアリガトウ」で、４節は「明日から支那の友達と仲良く暮らしてゆけるのも、兵隊さんのお陰です～」とある。「支那の友達」までが日本兵への感謝の対象になっていたとは知らなかった。

航空兵の小学校訪問があり、我々は校庭に人文字を書いて待っていると、航空兵は白いマフラーをなびかせ、複葉機の翼を振り、さらに何度も上空を旋回して、大きな歓声の中をエンジンの音を響かせながら飛び去って行った。こうして私の航空兵への憧れは一層強くなった。

桐明正（1949年高校卒、1953年大学卒）は14歳の時、上原謙主役の松竹映画「西住戦車長伝」（日中戦争で活躍し、「軍神」と言われた）を見て感激し、少年戦車兵を志望。最初両親は躊躇していたが、結局受験して合格した。しかし自宅待機中に終戦となったという。音楽、映画、スポーツ等、様々なことが戦争に収斂して行く時代であった。

◇キリスト教撲滅運動

神社非宗教論[1]、排他的ナショナリズムの高まりとともに、宣教師の伝道は困難になり、宣教師は相次いで帰国するという時代であった。

1　大日本帝国憲法では信教の自由は明記されていたが、「神道は習俗で宗教ではない」という解釈で、神道を他の宗教の上位に置くとの公式見解をしていた。

1940（昭和15）年９月、興亜青年連盟主催のキリスト教撲滅演説会が福岡県公会堂で開かれた。会場には危機感を抱く教会員や西南の学生達が集まっていた。弁士は「クリスチャンは売国奴だ」の発言に高木俊一郎[2]は「ちがいます。私は愛国者です」というと「馬鹿野郎、お前はアメリカ人か、スパイか」と罵声を浴びせられた。さらに「西南をつぶせ」「福岡女学院をつぶせ」の発言に西南の学生達も一斉に異議を唱え「キリスト教撲滅、近衛内閣打倒を期して天皇陛下万歳三唱を」との発声に大野寛一郎[3]牧師は決然と立って「キリスト教撲滅には賛成できない」と言うと会場はいよいよ騒然となり「警官が保護の名のもとに学生達を検束した」（『福岡地方における民主主義の基盤と発展』）

翌朝、超満員の学院チャペルで波多野培根[4]先生は“天皇陛下万歳はみだりに用いてはいけない。学院の危機に君達はよくやった。”と評されたという。

キリスト教撲滅大會で
聽衆から不穏言動
大野牧師取調べらる

地球鉛筆

キリスト教撲滅運動の様子を伝える新聞記事（九州日報1940.9.25）

2　西南女学院大学初代学長、小児科医。当時は中部教会会員で九大の医学生。聖路加看護学院教授、西南女学院看護学部創設、著書多数。

3　キリスト教団の福岡中部教会牧師で、戦後は皮肉にも県の公安委員長として警察の民主化に貢献した。大きく変わる時代の象徴的な出来事であった。

4　高等学部名誉教授。中学部、高等学部で哲学や基督教倫理などの教鞭をとる。語学に堪能で、英語、ドイツ語はもちろん、さらにギリシャ語、ラテン語、ヘブル語にも精通していた。

◇太平洋戦争

1941（昭和16）年12月８日、日本は真珠湾攻撃で太平洋戦争に突入、破竹の勢いで勝ち続け、その「皇軍」の戦果は華々しく報道され、国民は沸き立っていた。しかし、翌年６月のミッドウェイ海戦では機動部隊全滅という大敗を喫し、太平洋戦争の主導権を失った。開戦からわずか半年のことである。にもかかわらず、政府は国民にこの事実を知らせず戦争を継続、陸軍は拡大した戦線で補給路を断たれ、弾薬どころか食料の補給もなく、戦没者の60％強、140万人が餓死という悲惨な結果で、兵士達が戦ったのは「敵」ではなく「飢えとマラリヤ（熱病）」であった。

◇滑 空 部

中学に入ると滑空部（かっくうぶ）に入った。学校には文部省型の初級用滑空機（プライマリー・グライダー）が２機あった。三角の支柱に、むき出しの座席（シート）があり、左手で目の前の支柱を握り、右手で操縦桿を握ると、号令とともに10人位が二手に別れて、かけ声を掛けながらゴム索を引っぱり、一定の距離になったら、尾索のロープを放すとゴム銃のように飛び出すという素朴なものであった。飛ぶ高さは２、３メートル位であったろうか、数秒間ではあったが、友人を見下ろしながら、飛ぶ爽快さは忘れられない。

ある時、先輩が乗って勢いよく飛び上がったが、突然「ガクッ」となり彼は思わず操縦桿を引いてしまった。グライダーは急上昇するや、そのまま失速して尾翼からドーンと落ちた。彼は「ウッ」と言ったが、大事には至らなかった。しかし支柱は折れ、翼もワイヤーが切れバタンと落ちていた。

こんな危険な事なのに、監督の教官はいなかったが、砂浜やグラウンドで飛行兵を夢見ながら毎日練習をしていた。

戦後、先輩は学校の指示でグライダーを燃やしたが、私は燃えた機体を見て思い出とともに夢が破れたような気がした。

◇中学部入学

1944（昭和19）年、入学当時１学年各クラスは実に67～68名という、文字どおり「すし詰め」であった。おそらく教員が不足していたのであろう。

長身で英語と教典（聖書）の先生がおられた。副田正義といい、英語の発音はお世

辞にも上手とは言えなかった。チャペルでは標準語で弁舌さわやかに話されたが対照的にその服はうす汚れた「つなぎ」で、悪ガキどもは先生を親しみを込めて「ルンちゃん」と呼んでいた。教師が殴打するのは当たり前というあの頃、副田先生は絶対に暴力を振るわれなかった。そして「イヤなことをされたら忘れられないだろうが、許してあげることが大切だ」と繰り返し言われていた。まことに個性豊かで、誠実な先生であった。

◇配属将校と校長

学校には「軍事教練」を指導する配属将校がいた。事によっては校長でも罷免できると言われていた。

1943（昭和18）年山本五十六連合艦隊司令長官が戦死し、６月５日、国葬となり、学校でも追悼式が行われることになった。ところが当日、数人の生徒が集合に遅れたので、配属将校は「一部の者の怠慢は全体の責任である」と全校生徒を校庭に正座させた。行事の前に巻き直したゲートルは足に食い込んできた。それを見ていた校長の伊藤俊男先生も朝礼台の上で座られた。驚いた配属将校が制止しようとしたが、「生徒の不始末は私の責任です」と座り続けられたという。桐明正（前出）は最前列で一部始終を見ていた。この事は生徒の間で今も語り継がれている。

戦後のこと、昼休みに一人のおじさんがパンを売っていた。驚いたことにそれはかつての配属将校で、それを知らない下級生は気軽にパンを買っていたが、私は買ったパンを押し戴くようにして受け取った。時代の変革を実感する出来事であった。

構内に狭窄射撃場を作り、射撃の訓練が行われた。（1934.10）

◇根こそぎ引き抜く

糸島の元岡村に飛行場作業に行った。飛行場作業と言っても、真夏の炎天下、身の丈程にものびた雑草を一日中ひたすら「引き抜く」だけの辛い作業であった。

当時の名簿を見ると、一組の担任は村上寅次先生であったが、それが古沢基生先生に変わっていた。たまたま村上先生の歌集「望郷」の冒頭の添え書きを読んでそのナゾが解けた。

「1944（昭和19）年７月12日、糸島郡元岡村に中学生を率いての勤労作業中に再度招集令状来る」とある。単なる「担任の変更」と思われる出来事の背後に、重い事実があったのである。さらに、「炎天の　野に立つ我を　根こそぎに　引きぬくごとく　令状来る」という先生の短歌を読みハッとした。あの夏の日、雑草を「根こそぎ引き抜く」という同じ体験を思い出したからである。また「門を出て　吾子の頭に手を置きぬ　再び帰ることを言わずして」の短歌にも敗戦の気配濃厚なあの頃、令状を受け取るという戦争の非情を読み取ることが出来る。

◇少 年 兵

海軍の予科練習生の軍服は魅力的で、当初は非常な人気で、数十倍の応募があり、軍歌「七つボタンは桜に錨」（若鷲の歌）は国民に愛唱されていた。少年兵はその他に戦車兵、通信兵などあり、おおよそ14歳頃から志願していた。しかし、それも次第に少なくなったのであろう、学校ごとに応募数が決められ、その数は次第に増えて最後には70人にまでになり、生徒を説得する教師は苦慮したという[5]。

西南では応募しなければ学校がつぶされる、などと言われ、当初の４学級が事後３学級になったという。（渡辺恕・浦了談：1946年中学部卒）

◇二人とも

西田信一（1945年専門学校卒）は、弟につづいて出征することになり、父親の知一は我が子が身につける日の丸の旗に自ら詠んだ短歌を書き残した。

「かけがえのなき子を　二人とも　征かしめて　ひたすらに恃（たの）む　いやはての勝を」

「弱かりし　二人の吾子が　斯く育ち　相次ぎて征く　おほき幸」

5　西条寛雄伝、『祈りに生きた伝道者』鎮西学院、1972年

「心残り　今はあらめやも　二人とも　子を征かしめて　この夜　いぬるを[6]」

旗に書かれた句には「二人とも」の文字がある。そして、手塩にかけて一人前に育てた「弱かりし」息子達を相次いで戦場に送り、その上「心残り今はあらめやも」と言うのである。父親の悲痛な思いが行間に凝縮されている。幸い二人とも、無事復員されているが、戦争では多くの若者や親達の同様の秘められた悲痛な思いがあったのだと思う。

◇福岡大空襲

1945（昭和20）年６月19日、夜10時過ぎ、警戒警報が発令されたが、さして驚かなかった。しかし、真夜中の12時過ぎ、サイレンが断続的に鳴り響いた。空襲警報である。見上げると、幾筋ものサーチライトが音もなく機影を追っていた。やがて地を這うような爆音とともにB29が照らし出された。「いよいよ来たな」と足がガタガタ震えた。間髪を入れず高射砲がえい光弾とともに打ち出されたが、一発も当たらなかった。

やがて、ザーッという不気味な音とともに焼夷弾が投下され、瞬く間に火の海になった。我々はバケツで水をかけ消そうとしたが、そんなもので消せるわけはない。我が家の軒先や壁に水をかけ、類焼を防ぐのが精一杯であった。いつの間にかサーチライトも消え高射砲も鳴りをひそめ、B29は超低空で機体を赤く染めながら悠々と北へ飛んでいった。近所の人もいなくなり、隣家も燃え尽きた。やがて火は消え、見るとあたり一面焼け野が原で、物音一つ聞こえないあの不気味な静寂は忘れられない。

通りに出て見ると、今の大正通りの東側は無傷だったが、西側は我が家の他、一軒だけを残してことごとく焼けてしまっていた。大濠公園の「貯金局の前には恐ろしい形相の死体の山を見た」（大名小学校昭和20年卒業生、「福岡大空襲の思い出」）という。今、公園で子どもたちは喜々として遊んでいるが、当時の地獄絵は想像できない。

翌日、学校まで歩いて行ったが、あたりはひっそりと静まり返り、ただ木の枝にかかった幾筋かの細いスズ箔（レーダー妨害用）が音もなく揺れていた。

◇米兵捕虜斬首事件

横浜BC級裁判の記録によれば、福岡大空襲の翌日、その報復として米軍の捕虜８名が日本兵により殺害されている。場所は西部軍司令部南西の空き地、今の赤坂小学

6　眠るの意

校の辺りの空き地である。同様の事件は空襲の後、日本各地で起こっていて、民間人も竹槍で米兵を殺害している。今では考えられない憎しみの連鎖である。

◇FATHER FORGIVE

西欧の先進国でもゲルニカで有名なスペインを始めとしロンドン、ベルリンなどでは無差別爆撃を受け、その報復を行っている。1937（昭和12）年の在南京５カ国の外交代表は日本に対して南京爆撃の停止要求をしているように、我が国も例外ではない。

イングランド中東部、コベントリーに大きな教会がある。焼け落ちた教会跡の横には焦げた木の十字架があり、それには“FATHER FORGIVE”「主よ、許し給え」と書いてあるが“人の愚かさ”の許しを願う祈りで、そこにはドイツを非難する言葉はない。相手を非難することからは真の和解は得られないというのであろう。

一方、日本の都市における無差別爆撃の責任者カーチス・ルメイ米空軍司令官に、戦後、佐藤栄作内閣は勲一等旭日大綬章を叙勲している。両者の大きな違いには驚かされる。

◇終　　戦

1945（昭和20）年８月15日、玉音（天皇の声）放送で戦争は終結した。あの日皇居の前で涙する人たちの写真があるが、私もいささか残念という気持ちはあったがそれよりも灯火管制[7]の暗い夜に慣れていた私は、これから暗幕なしの明るい夜を過ごせるという、あの開放感、安堵感は忘れられない。今、何気なく見ている「町の灯り」にも私は「平和」を実感する。

◇米軍進駐

同年９月の末、いよいよ進駐軍が来るというので、風評におびえる人々が、リヤカー等に大きな荷物をのせ、昼夜をわかたず、来る日も来る日も、赤坂門の大通りを南に避難していた。新原昭二（1950年高校卒）も糸島に疎開したそうで、筑肥線は無料であったという。

それから４、５日経った頃、２階から何気なく通りを眺めていると、自動小銃を持

7　戦時中、夜間に灯りが漏れて爆撃の目標にならないように窓に暗幕、電灯にも黒いカバーをするよう決められていて、夜になると外は真っ暗であった。

ち迷彩服を着た米兵が４、５台のジープに乗り、ゆっくり来るのが見えた。「いよいよ来たな」と緊張しながら見ていると、兄が慌てて入って来た。聞けば米兵に道を聞かれたという。話しかけた米兵はどうやら２世らしかった。

恐れていた米軍の暴行の噂もなく、徐々に住民は戻り、我々の日常生活も平静を取り戻したが、今度はそれまで見た事もない上陸用舟艇に乗った米兵が、取り巻く子どもたちにガムやチョコレートを配ったりしていた。やがて子どもたちは米兵に寝間着を見せながら「キモノ、キモノ」、「チェンジ、チェンジ」などと言ってチョコレートやガムと交換してもらっていた。

◇Made in occupied Japan

先日、自宅でバイオレット模様の洋皿を見ていたが、ふとその裏に小さな文字をみつけた。

Rossetti Chicago USA Made in occupied Japan

その皿には見慣れた Made in Japan ではなく“occupied Japan”という文字が入っていた。“占領下の日本製”というのである。そこまで徹底していたのかと思い知った。そのことでさらに CCD という言葉を思い出した。Civil Censorship Detachment（民間検閲局）の略で、当時すべての手紙は開封検閲され、CCD と書かれたテープが貼られていた。また、演劇でも「忠臣蔵」のような“仇討”の復讐劇の上演は禁止されていたという。この CCD の３文字は政治、思想の検閲を意味する文字であった。

1945（昭和20）年８月30日、厚木飛行場に連合国軍最高司令官マッカーサー元帥がコーンパイプをくわえて飛行機から降り立つシーンも私は単なる「歴史の一こま」として見ていた。さらに、手を腰にあててくつろいだ背の高いマッカーサー元帥の横で不動の姿勢の昭和天皇[8]が並ぶ写真は、「天皇の人間宣言」と共に「敗戦」を象徴するシーンであることを忘れていた。

◇Youth for Christ Rally

赤レンガのチャペル（現在の大学博物館）では、毎週土曜日夕方、英語で話しを聞いたり讃美歌を歌ったり、ゲームをしたりして、米軍の兵士と日本の若者との友好を図る Youth for Christ Rally というプログラムがあった。中でも従軍牧師シンプソン

8　当時天皇は現人神（あらひとがみ）としてあがめられていた。

のピアノ伴奏は印象的で、それまで讃美歌は楽譜通り弾くものと思っていたが、彼の演奏は和音といい、旋律の間の動きといい、自由なアメリカ文化を象徴するような演奏であった。プログラムの最後に配られる砂糖入りのコーヒーとクッキーも楽しみであった。

◇新制高等学校

1947（昭和22）年、学制改革（６・３制）で旧制中学は終了、新制高校になった。必須の剣道、柔道は中止。野球、ラグビーは復活した。弁論部や社会研究部、新聞部が新設された。ギャロット夫人の英会話も新鮮であった。生徒会の会長選挙では候補を立てた侃々諤々（かんかんがくがく）の論議も忘れ難い「言論の自由」の思い出である。

◇朝鮮戦争とマリリン・モンロー

1950（昭和25）年９月、朝鮮戦争で米軍を中心とする国連軍は、一時釜山近郊まで追いつめられた。西公園の保険局は米軍の病院（118Army Hospital）として接収され、病室は満室、廊下までベッドが並んでいたという。ある時、米軍のトラックが荷台に星条旗で包んだ大きな長い箱を幾つか乗せて、昼間にライトをつけたまま西へ走って行った。米兵の戦死者を運んでいたのであろう。私の前を歩いていた米兵が呆然と立ちすくんで見ていた。

当時、板付飛行場は米軍の最前線基地で、空港に通ずる国道三号線を兵隊や武器を積んだ軍用車が走っていた。この戦争を契機として警察予備隊が発足。やがて自衛隊になり、今、その海外派兵が論議されている。

うわさのマリリン・モンローが米国メジャーリーグの外野手ジョー・ディマジオとともに福岡を訪れた。1953（昭和28）年に朝鮮戦争が休戦となり、その翌年、韓国駐留の米軍を訪問する途中に立ち寄ったもので、友人と中洲のホテルの前で幸運にも彼等に遭遇したのは忘れ難い。

◇宣 教 師

1956（昭和31）年に母校西南学院高等学校英語科の教員となった。1984（昭和59）年に行った第３回の訪米研修旅行でのホームステイでルイジアナ州に滞在したが、

フェナー先生[9]の計らいで引退されたグレーヴス先生のご自宅を訪ねた。あずま屋のある広い庭に粗末な小さな家で、先生は日本の思い出の品々に囲まれて独りで住んでおられ、あの優しい笑顔で我々を迎えてくださった。歓談の後、先生の好きな藤の花の前で写真を撮り終えた時、先生は庭の向こうの墓地を指し「私の墓はあそこです」と淡々と言われた。「来るべき日」を見据えながらの毎日を過ごしていらっしゃるのであろうと深い感動をおぼえた。

1951（昭和26）年、大学のグリークラブが西部合唱連盟のコンクールに優勝、東京での全国大会に出場するための募金をしていたところ、ギャロット先生が通りかかられ、事情を聞くなり財布をサッと逆さにして、中のお金を全部出された。我々は恐縮し、ただ平身低頭、言葉もなかった。

◇学生運動

1966（昭和41）年、成田空港建設反対の「三里塚闘争」に本校の生徒２、３人が参加して成田の警察に拘束され謹慎処分になった。学校側は「生徒は未熟だから政治に関与すべきではない」というのが理由であった。今や18歳から選挙権が与えられ、酒、タバコを許すか否が論議されているが、時代の変化に新たな感慨を覚える。

沖縄返還の闘争で学生の政治団体により１号館が封鎖、破壊された。その頃、干隈の郵便局で偶然 E. B. ドージャー[10]院長にお会いした。私は何気なく「先生、大変ですね」と微笑みながら言うと、とたんに真顔になられ「すみません」と言って深々と頭を下げられた。私は「いえ、いえ」と言うのが精一杯であった。

先生は院長として学院の危機的な状況に日夜心を痛められていたのに、高等学校とはいえ同じ西南に勤務しながら傍観者でしかなかった自分を恥じた出来事であった。

◇国際化時代

1951（昭和26）年、豊田佳日子（1953年大学卒）が毎日新聞社主催の「第５回マッカーサー元帥杯全国学生英語弁論大会」（マッカーサー杯）で優勝し、「英語の西南」の存在を知らしめた。

9　Charles Wordon Fenner：1961年９月から1980年３月まで、中学校の専属宣教師で英語も担当した。

10　Edwin Burke Dozier：アメリカ南部バプテスト連盟の戦後初の宣教師として再来日。西南学院理事、非常勤講師を経て、1958年10月から西南学院大学教授。1965年11月西南学院院長就任。

大学グリークラブは先輩の福永陽一郎[11]の指導よろしきを得て、1979（昭和54）年より数度に渉るアメリカ親善旅行、さらに1958（昭和33）年のヨーロッパ演奏旅行では、ザルツブルグのヨーロッパ・カンタートに出演するなど、活動を拡げた。

高等学校では「AFS」[12]、「YES」[13]等のNPOを通じ受け入れ留学生を引き受け、生徒の派遣留学を実施していたが、新たに家庭滞在を主とした研修旅行を実施することになった。第１回の訪米研修旅行は宣教師E.S.マフェット[14]先生の尽力でテキサス州タイラー市において実施することにしたが、40名の募集に150名もの希望者があり選考に苦慮したので、新たに30名の枠で豪州の研修旅行を実施するほどであった。

テキサス州での研修旅行の途中、ロサンゼルスの同窓会との懇談会の際、先輩の西伊宗（1948年専門学校卒）から貴重な話を聞いた。それによれば、第二次世界大戦中、在米日系人は敵国人として冷遇されていたが、日系二世部隊がドイツ軍に包囲されたテキサスの部隊を非常な犠牲を払って救出したことで、テキサスには日本人に対して好意的な人が多く、ホームステイの場所としては適切であるというのである。改めて戦争がもたらす問題の深さを思い知った。なお、この二世部隊は米国軍事史上、最も多くの勲章を受けた部隊であるとも言われている。

第２回訪米研修旅行（ルイジアナ州バトンルージュ市）

11　1944年旧制中学部卒業
12　American Field Service：国際的なボランティア団体で留学サポートもしている。
13　Y.E.S. ESL International, Inc.：アメリカ・カリフォルニア州に本社を持つ総合留学サポート会社。
14　E. Sherwood Moffett Jr：1979年３月から1984年５月まで高等学校の英語科教員

◇男女共学

新聞の記事で、中学に入学する生徒の数が減少していることを知り、やがてそれは高校にも及ぶであろうと、友人と図って山口裕史、松澤一寛らの先生方と職員会議に共学を提案した。その結果、委員会を作り1993（平成５）年、調査と議論を重ねて共学に移行することになった。歴史ある男子校の共学移行は予想以上のインパクトを与え、受験者は我々の危惧を打ち消すように、前年度の２倍に増え「西南ショック」という造語まで生まれるほどであった。

入学式ではマスコミのカメラの放列の中を男女の新入生が通って行く姿は、我々に新たな希望と責任を感じさせる情景であった。

◇Coats off to the Future

グリークラブの記念誌『四十年の歩み』の中に“Hats off to the past, coats off to the future.”[15]（過去に脱帽し、未来には上衣を脱げ）というフレーズがある。学院に名を連ねる者は、単にその過去を学ぶだけでなく、未来に向かい努力しなければならないと思う。

15　John W. Shepard, Jr. “ON THE FORTIETH ANNIVERSARY OF THE GLEE CLUB”、西南学院グリークラブ『四十年の歩み』、1960年、ｐ６